藤田尚志特別講義 二〇二〇年度「結婚の脱構築 -ヘーゲル・キェルケゴール・マルクス-」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院教養デザイン研究科 公開日: 2022-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩野, 卓司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22595

【藤田尚志 特別講義】二〇二〇年度

「結婚の脱構築 ～ヘーゲル・キェルケゴール・マルクス～」

岩野 卓司

二〇二〇年度は新型コロナウイルスが蔓延した影響で大学構内への入稿制限が行われたので、この特別講義もオンラインで実施されることになった。Zoom の録画機能を用いての学内外への期間限定配信という実験的な試みであった。十二月三日から三十一日まで配信したのは、藤田尚志氏の「結婚の脱構築 ～ヘーゲル・キェルケゴール・マルクス」である。藤田氏は現在九州産業大学国際文化学部教授である。藤田氏はベルクソンの研究者として知られ、国際的に活躍している第一人者と言っても過言ではない。日本のベルクソン研究が世界で高い成果をあげているのも、藤田氏の存在を抜きにしては考えらえない。内外で発表された数多くの論文や講演、ならびに『コレージュ・ド・フランス講義録』の翻訳は日本のベルクソン研究の水準を引き上げ国際化させた不朽の業績と言えるだろう。藤田氏のもうひとつの面は、「結婚の脱構築」というテーマで思索する哲学者である。愛・性・家族に関する諸々の問題を、フランスの哲学者ジャック・デリダ流の「脱構築」の手法を用いて探求していくことである。今回は彼のこの探求のテーマについてオンラインを通して講義してもらった。

そもそも結婚について考えるとは、どういうことだろうか。夫婦別姓、少子高齢化、同性婚などの話題になっている社会問題を考える際に、結婚は常に前提にされているが、結婚それ自体を問うものは意外と少ない。しかも哲学的に問うものとなるとさらに少なくなる。結婚は自明なものとして語られているのだ。しかし、本当に結婚は自明なものだろうか。藤田氏はエリザベス・ブレイクの『最小の結婚』を取り上げ、結婚自体が自明なものではなく哲学的に問わなければならないことを指摘する。リベラル・フェミニストの立場のブレイクは、結婚における一夫一婦制、性規範、家族観にも男性中心的なものがあるから哲学的に問い直されなければならないと考える。彼女は法を特に問題にしており、法による再定義によって、新たな結婚を提起しようとしている。藤田氏はさらにこの法の問題の背後に哲学史に連なる形而上学の問題系が控えていると考え、結婚に関する法を形而上学の問題として考えることの必要性を訴えている。

そこで、彼はジャック・デリダの脱構築を参照する。脱構築とは何かというと、それは現実を矛盾や異質なものも含めて読み解くことである。フランス語のデコンストリュクションという言葉は、構築という意味と解体という意味の二つを併せ持つが、この矛盾した事態をそのまま認めながら思索することを意味するのである。つまり、現実は様々な力がせめぎ合う場であり、この力の緊張を解きほぐしながら既存の体制を変革していくということなのである。そもそも哲学の仕事とは、常識を疑うことなのである。例えば結婚に関しては、夫婦別姓や同性婚には、反対する保守的な人も依然として少なからずいるが、多くの国で法的に認められていることを考えれば、現代の社会常識としてはおおむね許容範囲と言える。ところが一夫一婦制に反対してポリガミーに移行するとなると、反対が多い。理由としては、複数の男女関係から父や母が違う複数の子供が生まれ、親が子供を深く愛せないからだと言われている。しかし、社会主義者フーリエのようにポリアモリーという自由な複数の愛を主張する者もいた。一夫一婦制を私たちが道徳的な規範として採用しているのは、私たちが結婚の形而上学に囚われているからではないのか。だから、藤田氏は結婚をその形而上学的背景も含めて脱構築しようとするのである。

この視点から藤田氏は、ヘーゲル、キェルケゴール、マルクスを論じていったのだが、重点的に扱われたのは

ヘーゲルの『法の哲学』だった。時間の都合などもあり、マルクスについてはほとんど触れられず、キェルケゴールについても結婚の倫理と宗教をどう脱構築していくかが、今一つ見えづらかった。それに対して、ヘーゲルに関しては、その『法の哲学』の結婚に対する見方が個人の契約の基づいた近代的なものであることを明らかにしたうえで、教育論と財産論の立場から論じていった。そして、ヘーゲルを読解しながら、すべてが物化され、契約された世界で愛、性、家族についてどう考えるかの疑問をさしはさみながら、ヘーゲルが力説する人格と物件の峻別を脱構築しようとしていた。

キェルケゴールやマルクスについても十分時間をかけて論じていたら、ヘーゲル論も生きてきて、講義はさらにダイナミックなものになっていただろう。講義が面白かっただけに、その点が悔やまれる。